

オスカーがその香りに気づいたのは、彼女が執務室に現れお茶を淹れた時のことだ。

「なんかお前、甘い匂いがするな」

「え」

お茶のカップを彼の前に置いたティナーシャは、びくりと身を震わせる。

「分かります？」

その問いにオスカーは「いつもと違うからな」と言いかけてのみこんだ。そんなことを口にしてはいつも彼女のことを気にしているように思われてしまう。確かに彼女は隣国の次期女王で、彼の呪いを解くために来ている人間だ。それだけでなく強大な力と、それ以上の無謀な行動力を持ち合わせている。正直言って放置しておくのをしでかすか分からない危険人物だ。

だから常に気にかけていると言えばその通りなのだが、表に出せばそれは微妙に意味合いが異なってしまうのだ。オスカーはそこまでを一瞬で考えると、無難な答えを口にした。

「それだけ匂いがついてれば誰だって分かる。何か食べってきたのか？」

「食べてもききましたけど、作ってきた方です。ちょっと解呪に行き詰ってて、思考整理に焼き菓子……」

「お前、菓子なんて作れるのか」

「料理できるって言ったじゃないですか」

言われてみれば聞いた気もするが、「暗殺対策に」など

というので本気にしていなかった。ティナーシャは白い頬を膨らませる。

「というか、料理は魔法薬作成に通じますからね。魔法薬作れる人間ならみんな料理は作れますよ」

「初耳だぞ、それ」

オスカーは何人かの宮廷魔法士の顔を思い浮かべたが、なかなか彼らと料理が結びつかない。特に壮年の魔法士長などは特にだ。のみこみきれない顔の彼に、ティナーシャは付け足す。

「材料を指定通りに作って指定通りの作成手順を踏むだけですからね。料理も薬も同じです」

「そう言われてみればそうなんだが」

「まあ、味には多少の個人差がありますけど」

「今の話通りなら個人差が生じるのがおかしい」

「できあがった魔法薬の質にも差があるってだけです」

そう言われてみると納得するしかない。だが、その論法で言うならティナーシャの作る料理は美味しいのだろう。オスカーは奇跡のように美しい女を眺めた。

「その焼き菓子はまだあるのか？」

「え」

ティナーシャは蘭色の目を瞪る。びっくりした猫によく似た表情で彼女は首を傾いだ。

「……召し上がるんですか？」

「単なる好奇心だ。ないなら別に——」

「作ってきます！」

言うなりティナーシャは執務室を駆け出していく。その様子に、残されたオスカーとラザルは目を丸くした。

王の幼馴染であるラザルは、声を潜めて問う。

「陛下、いつもは甘いもの召し上がりませんよね……」

「……好奇心だというのに。あいつは本当に子供だな」

次期女王があんなに条件反射で動いているのだからかとも思うが、それを可能にしようだけの力がある方が問題なのだろう。見る度にころころと表情を変える彼女の姿を思い出し、オスカーはふっと顔を綻ばせる。

ティナーシャはそれから一時間後、焼き立ての菓子と共に執務室に現れた。作っている一時間の間に冷静になったらしい彼女は、真つ赤な顔でお茶を淹れる。

「すみません、押しつけるような真似をして……」

「別にいいが、お前はもう少し落ち着け。廊下を走るな」

「あんまり城内を転移すると驚かれるので、走った方がいいかと思って……」

「どっちも驚かれるからやめろ。少しは俺の臣下の気持ちを汲め」

「みんな段々慣れてきて流してくれるようになりました」

「適応力が高いやつばかりだな……」

オスカーは狐色に焼かれた菓子を手に取る。まだ温かいそれは、口に入れるとほどよい甘さだ。

ティナーシャはそんな彼を緊張の目でじっと見つめる。

オスカーは彼女に出会う以前は、一年に一度食べるかどうかだった焼き菓子を味わうと、白い目を向けた。

「味はいい」

「味は!？」

「お前の視線が気になる。普通に食べさせろ」

「……すみません、適応してください」

ティナーシャは縮こまってそう言うと、少しだけ嬉しそうにはにかむ。そんな彼女の微笑に王は悪くない気分を味わって、久しぶりの菓子を楽しんだ。